

具体事例が並び、エネマネやERABのリアルがみえた！ 進化した「TOKYOエネマネセミナー2025」



7月16日（水）「TOKYOエネマネセミナー2025」が開催され、300を超える申込者を集める盛況ぶりを見せた。今回は、具体的な成功事例の深掘りと、エネマネ導入からアグリゲーションビジネス（ERAB）へとつながる発展性に至るまで、より進化したプログラムが展開された。

冒頭の東京都産業労働局の吉坂氏による講演では、「エネマネ関連事業予算を180億円に増額し、変動性再エネ増加に対応する調整力（DRや蓄電池）確保の重要性を強調。新たに「需給最適化に向けたエネルギーマネジメント推進事業」を創設した背景。見える化から、DRの「上げ」対応、ERABまで横断的に手厚い助成を行う“都”としての狙いを説明した。

2つ目のプログラムは需要家のエネマネをテーマに、3名のパネリストが登場したパネルディスカッション。パルコスモの三原氏が衣料品チェーン店でのAI活用EMSによる空調コスト10%削減と基本料金引き下げを、東京ガスESの沢山氏が大規模病院のESCO事業で二次側ポンプ消費電力50%削減、一次エネルギー10～20%削減とBCP対策の強化を、きんでんの橋口氏はZEBビルでのAI/IoT活用によるさらなる省エネと従業員の快適性向上を報告。事例を通して、エネマネが単なるコスト削減に留まらず、企業価値向上に繋がる「攻め」の投資であることがクローズアップされた。

3つ目の「はじめてのエネマネ導入講座」では、聞き手にエネルギージャーナリストの廣町氏、話し手にパルコスモの三原氏というインタビュー形式によるエントリー向けのプログラムを実施。社内検討の仕方から申請、業者選び、導入、実施後の検証など導入の9ステップを丁寧に解説した。

4つ目はERABのパネルディスカッション。リエネの小島氏、高砂熱学工業の栗山氏、ERAの川口氏が登壇。再エネの有効活用と調整力確保を使命とする参入動機が語られる一方、市場の未成熟さや高精度な予測技術、人材不足といった課題も浮き彫りになった。「市場が黎明期だからこそ東京都の補助金が参入リスクを軽減する大きなビジネスチャンスである」と小島氏は語った。そしてエンディングでは、ERABで成功するには、高精度な需要予測が必要であり、「それは、まさに今回のタイトルである『エネマネ』である」と川口氏が最後にまとめた。

5つ目は、クール・ネット東京の尾上氏が補助金「需給最適化に向けたエネルギーマネジメント推進事業」を丁寧に解説。

今回は、多くの事例や事業者らのリアルな声で構成され、エネマネは『攻め』の投資という動機も明確に感じられるセミナーとなった。参加者の脱炭素経営やビジネスを一步前進させる機会になったのではないだろうか。